【土木史研究　第11号　1991年6月　自由投稿論文】

博多の町割り（博多復興）の街づくりからの考察

正会員　長崎大学大学員　中田勝康

Consideration on the Reconstruction of Hakata Area (Fukuoka City) from Town Planning View

By Nakata, Katsuyasu

概　要

豊臣秀吉によって復興された博多の町は、長方形の短冊型の宅地割に特徴がある（それまでは矩形が多い）。

本論文では堺，近江八幡，京都等の町割りの状況と博多とを比較して、博多の町づくりが商業都市・兵站基地として、将来の繁栄性を狙った新鮮な街づくりプランであったと評価している。

〔キィワード：戦国期，都市計画，街づくり〕

1．はじめに

後背圏も含めて200万都市に育った福岡市の道路事情は必ずしも良好であるとはいえない。

しかしながら博多駅前から北に広がる博多地区の道路網はわかりやすい碁盤状であり、この地区を散策すると寺院や古い家並みがあるせいかほっとする気分を感じることができる。この街並みづくりに豊臣秀吉が貢献（1587年博多復興）したことはよく知られている。

古くから対外貿易を中心とした発展をしつづけた博多の町は、戦国時代に入って幾度も戦乱の火の粉を被むり、戦災の焦土となっている。

1587年（天正15年）豊臣秀吉による博多復興以前の町の状況としては、1569年（永禄12年）に５ケ月も続いた毛利対大友の戦いによって荒廃し、さらに1586年（天正14年）島津の立花城（福岡市名島）攻めに伴う被災によって焼野ガ原となっている。

この焦土となった博多を豊臣秀吉の命によって復興（俗に大閣町割といわれる）し、10町四方（約100ha）の碁盤状の町割を行うことによって、今日の福岡市博多の町なみの基礎が出来上がっている。

本論文では、この博多復興の概要と人口推移さらに堺（大阪府堺市）近江八幡（滋賀県）の町割も参考としながら、当時の街づくりの視点を整理してみたいと考える。

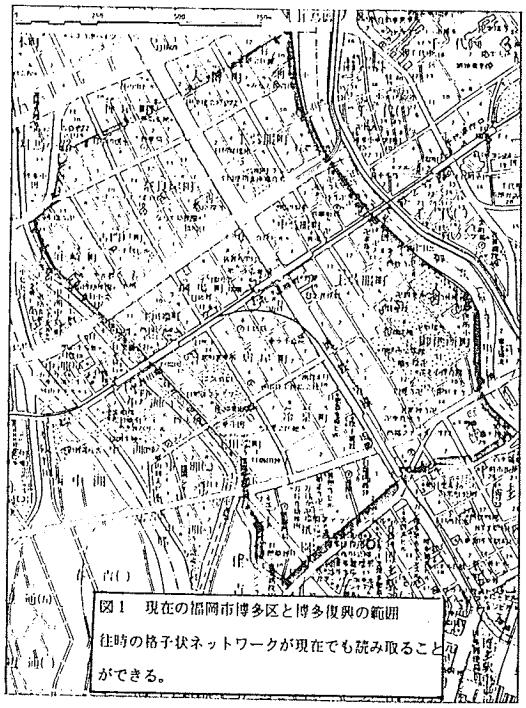


図１　現在の福岡市博多区と博多復興の範囲
往時の格子状ネットワークが現在でも読み取ることができる。

2．博多復興の概要

(1) 復興以前の博多の町のすがた

古くは「那ノ津」と呼ばれ、8世紀頃から博多という呼び名に変わっていった博多の歴史は古いが、推定1157年平清盛によって博多の町の北部海岸側に人工港「袖の湊」が築造されてから後が、町としては近世に入ると考えられよう。この袖の湊を中心に平家の日宗貿易が実施され、博多の町が商業を中心に栄えていった。

その後の町割・町の性格は大きくは変わらず、明との勘合貿易（1401年開始）によって商業都市としての基盤を高め「博多商人」という呼び名も定着していった。

1471年（文明3年）朝鮮の外交官申叔舟が成宗の命によって編纂した『海東諸国記』によると「博多の住民は1万戸余り、少弐と大友の2氏が分治している。少弐氏は西南の4千余戸，大友氏は東北の6千余戸を統治している。住民は商業を営み、琉球，南蛮の船が集うところである。北には白砂が30里もつづき、松林が多い。朝鮮に往来するものが九州中で最も多いのは、この博多である。」とある。

さらに、1563年（永禄6年）に来日したポルトガル宣教師のルイス・フロイスは、九州のなかで「博多ほど富貴な町はなく、すべて盛んなる泉州堺をまねて、まったく商人を基礎として作られた国家組織であった。」（『日本史』）と述べている。

この頃の博多の町は、町の周囲には堀が取り囲み、その内側に柵や塀がめぐらされ、町の入口には市の門が設けられており、非常時には閉ざされた。内部は東西に分れており、町人各自が自治組織を構成し、対外的な重要事に際しては一体となって行動しており、イエズス会（邪蘇会）宣教師は、博多の自治組織は戦火に遭いそうになると、金を払って解決すると報告しており、こうした報告や旅行記から畿内の堺と外観・内部とも類似していたと思われる。

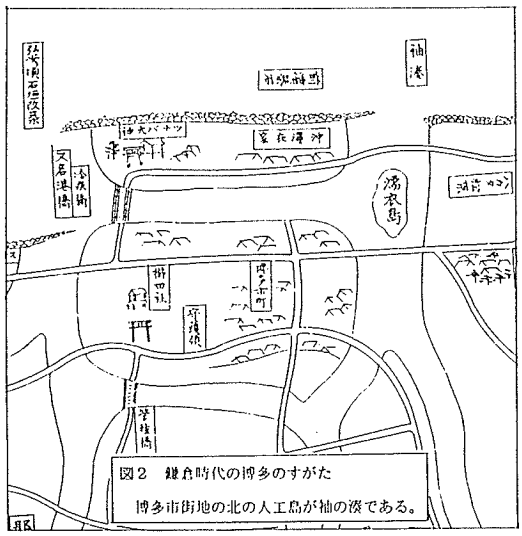


図2　鎌倉時代の博多のすがた
博多市街地の北の人工島が袖の湊である。

国際貿易や商業流通で繁栄する博多に、戦国の影響がおよぶ。1559年（永禄2）の旧暦2月の筑紫・秋月対大友の戦である。「博多の町には元1万の人家ありしが、十余年前（つまり永禄2年）、数人の領主（筑紫広門・秋月氏等）が之（大友氏）に対して戦争をなし、悉く破壊焼却せり」と1571年（元亀2年）9月の宣教師の書簡に記され、博多が壊滅状態になったことを示している。「然るに1年前（元亀元年）より再び家を建て、今は3千余戸あり」と1571年の書簡は続けている。

さらに、1586年の島津侵入によって焦土となった博多が復興するのはその翌年である。

(2) 博多復興による博多の町

1587年6月、博多の町は、東西南北およそ10町四方と定められ、その竪横に小路を割り付け、竪の通り、つまり南北の通りの道幅をやや広く、横の通り、つまり東西の通りの道幅をやや狭くした。王朝の頃の平城，平安京にならって、1町は方四百尺（約120m）をそのさいの割り付けの単位としたらしいという。

現在の大博通り（市小路）は、このときの縄張りの中心で、まずここから手をつけたために一小路と名付けられたのだという。

博多の町で現在も使われる言葉に「流」というのがあるが、これは南北，東西の町筋のそれぞれ中心を占める町名を取って、それにつながる町々をひっくるめ、「東町流」「呉服町流」などと称したものである。その由来は天正15年のこの時の町割にはじまっているといわれている。

南北の竪筋の道幅は3間以上もあり、ここには裕福な商家などが立ち並び、東西の横筋は、いわば裏通りの扱であったらしい。

こうして作られた10町四方の博多の周囲には、防備用の堀が設けられた。

南側の瓦町から辻の堂に至る横幅20間余の堀で、これは大友家の臼杵安房守が元亀の頃に砦用に掘ったものを、このさい利用したのだという。ためにこの堀は、安房守にちなんで房州堀と呼ばれた。

さらに臼杵安房守は博多と住吉との間を通って那珂川に合流していた御笠川の流を南北にかえ、承天寺，聖福寺の東側の松原を通る水道を新設していたという。これは「松原の堀切」と呼ばれ、江戸時代に拡張されて、現在の石堂川となっている。

この房州堀と松原の堀切を利用することで、博多は四方を水に囲まれた要害の町となった。

つまり北は博多湾、南は房州堀、東に松原の堀切、西は那珂川というわけである。

この四方を水で囲まれた要害都市博多の町を記した英人セーリスの日本渡航記の一部によると、「博多というのは堅牢な城があって、それは自然石で築かれているが、その内には大砲もなく、兵士も居らぬ、それは周囲に深さ5尋（約９ｍ），幅その2倍位の濠があり、跳橋があって、修理がよく行き届いている。（中略）この市はロンドンの城壁以内のロンドン位の大きさに見えた。家屋は大層よく建築され、平らであるから、市外の一端から他端まで見通される。ここは人口甚だ稠密で、人々は甚だ穏和丁寧である（村川堅固氏訳）」とあり、環濠都市を裏付けている。

３．堺の町割について

(1) 環濠都市　堺

博多の町とよく対比されることの多い、堺の町は、1562年（永禄5年）のポルトガル宣教師ガスパ

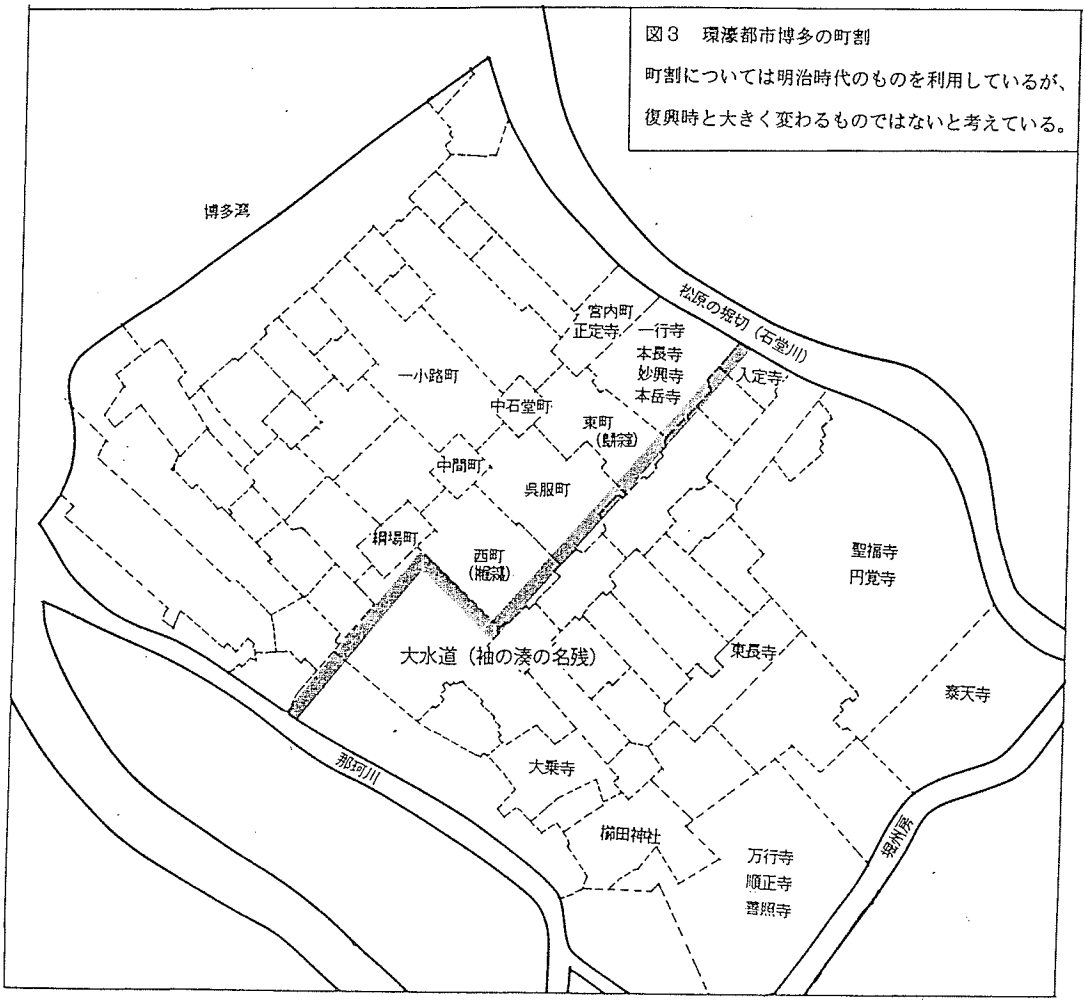


図３　環濠都市博多の町割
町割については明治時代のものを利用しているが、復興時と大きく変わるものではないと考えている。

ル・ビレラの手紙にある「町は甚だ堅固にして、西方は海を以て、又他の側は深き堀を以て囲まれ、常に水充満せり」と、ここにも水で囲まれた環濠都市堺が記録されている。

(2) 堺の町

堺の町は1615年（慶長20年）の大坂夏の陣で2万戸焼失し、いわゆる元和の町割（1615年）で、全面的に整地し直されている。1615年以前の町割については、今後の発掘などによって次第にその全容が明らかとなっていこうが、少なくとも環濠は確認されており、幅の明らかなものは10mを越え、深さも3m近いものもある。堀は町を取り囲むとともに、町の中にもいり込んでいたと考えられている。なお、この濠は自由都市　堺を支配下とするために、1614年（天正14年）豊臣秀吉によって埋められたと記録されており、ここには秀吉の破壊の影響がみえ、建設的な博多とは対称的である。

1) 室町時代の堺の町の規模

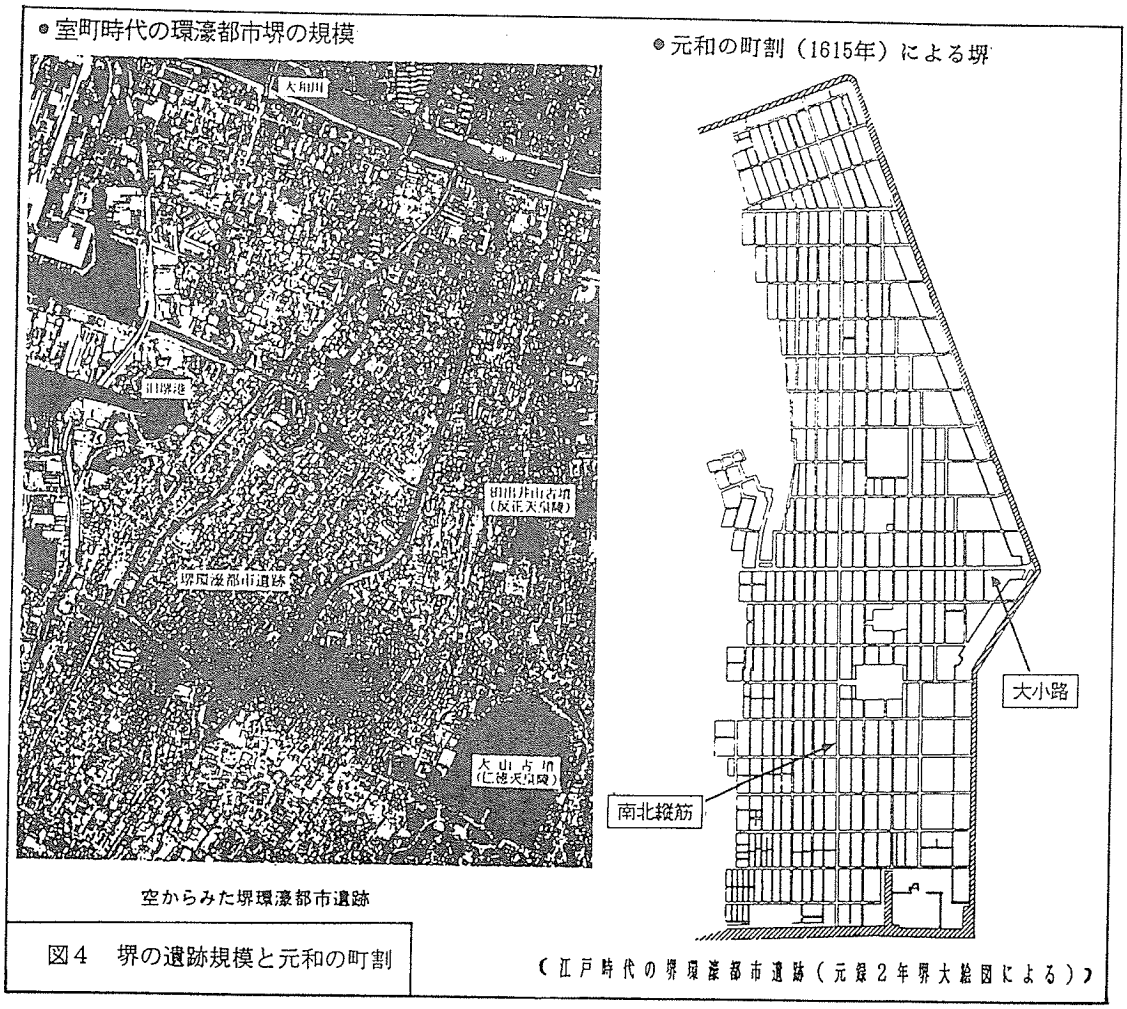
推定図からみると、南北2300m，東西600m（面積約140ha）であり、1399年（応永6年）の応永の乱では1万戸焼失，1615年には2万戸焼失の記録もみえ、博多の町よりやや大きかったと考えられる。

2) 室町時代の宅地割

この頃の京都と堺は大体似たり寄ったりの宅地割の構造をもっていたと推定できる。小さな家では間口1間にも満たないものもあったであろうが、平均的には1間半から2間位の間口の家が建ち並んでいる状況が室町末期の堺の景観であったようだ。

3) 室町時代の道幅

ルイス・フロイスは堺の街路について「交差した



空からみた堺環濠都市遺跡

図4　堺の遺跡規模と元和の町割

（江戸時代の堺環濠都市遺跡（元禄2年堺大絵図による））

大道を除いた街路は皆狭く、慶長大震災のあった翌日には倒潰した家屋・木材・石の塀などのために、街路が閉塞されて、足踏もならぬ程であった。」と記し、交差した大道すなわち東西の大道であった大小路と南北の大道以外の街路は狭かったことが推測される。元和の町割以後の堺では、大小路が5間，南北縦筋が4間半の道幅であったが、それ以前はこれよりさらに狭かったのであろう。

4．博多の町割

(1) 町割の基本方針

町割に当たっては、南方（陸側）を上手、北方（海側）を下手として東西道路と南北道路によって、町を縦横に割った。南北道路が幹線道路と言われるもので幅員は一般的に3間（約5.5m），東西道路は補助幹線で幅員は2.5間（約4.5m）であり、この道路によって区画された区域は、一般的に東西400尺（約120m），南北800尺（約240m）の短冊型であり、この形状は新鮮である。

この短冊型が基本型であるが、更に小割にされた区域もあり、また道路幅も小割のところでは2間～1.5間（3.6～2.5m）である。

また町単位としてみるならば、短冊型の中間に、矩形の町が交互に挟まっている（図3の中石堂町，中間町，綱場町等）のも、他都市では見られない町単位である。これなどは南北の縦筋の流れと、東西の横筋の流れとを作り出すための工夫であり、復興以前から縦筋，横筋（すなわち流）は存在していたようにも考えられる。ちなみに例に挙げた3町は石堂流に属している。

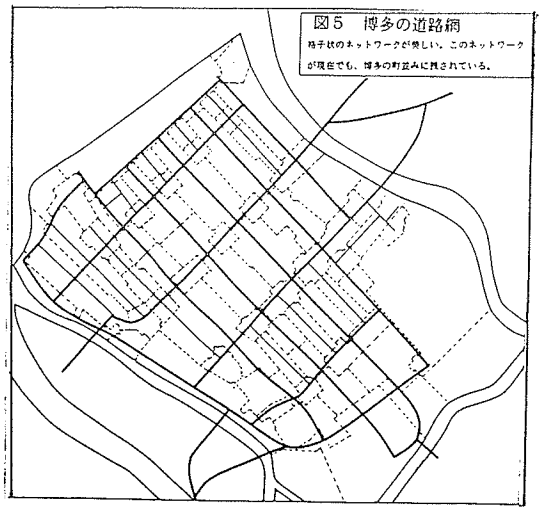


図5　博多の道路網
格子状のネットワークが美しい。このネットワークが現在でも、博多の町並みに見られている。

博多豪商神屋宗湛は、6尺5寸4分の間杖（長さ約2m）で実地に測量して歩いたようで、その間杖は江戸時代には神屋家が所持していたが、その後豊国神社（博多区奈良屋町）に奉納され、第2次大戦で焼失した。

(2) 博多の町割りに関する他都市の町割

1) 平安京

東西南北10町四方の町をつくり、方400尺（約120m）を割り付けの単位として、博多は復興されたが、これは平安京を参考としたといわれている。

平安京は平城京（東西4.2Km，南北4.7Km）を例として、東西32町（4.57Km）南北38町（5.31Km）で構成され、1京は36坊から、1坊は16町から成り立ち、1町は400尺（約117m）平方でなっている。特に、1町は間口50尺，奥行100尺といううなぎの寝床のような宅地32戸に分割されていたらしい。

2) 近江八幡（滋賀県）

1585年（天正13年）、織田信長築城の安土城があった八幡に移封された羽柴秀次（秀吉の養子）は、直ちに居城と城下町の建設にとりかかり、琵琶湖の水運を生かして城下を楽市・楽座の町とした。

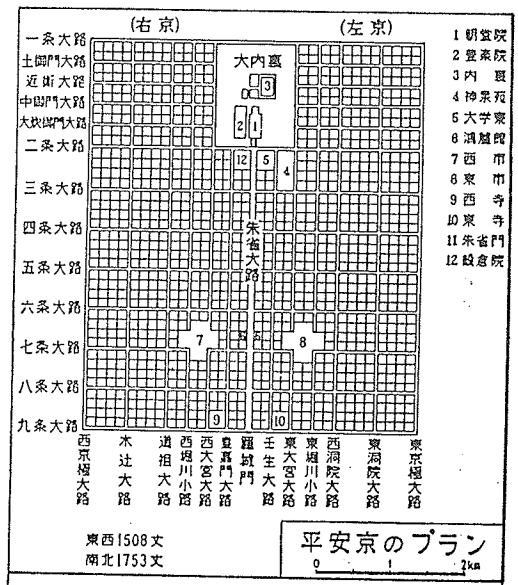


図6　平安京の町割

この図の最小の四角が町の単位で400尺（約120m）平方である。

以来、この町は自由商業の地として栄え、後の「近江商人」を生む基盤をつくった。

城下町は八幡山を囲繞する延長６キロの八幡堀を開削し、その土砂をもって町の西半分の湖畔の沼沢地を埋め立て造成し、縦12筋，横４筋（ところによって６筋）の碁盤状の町づくりを完成した。八幡堀は両端を太湖（琵琶湖）と結び、城の内濠を兼ねると共に運河としての目的をもつものである。また、町の４隅に寺院を配置、前線基地とした。

この町割のユニークなところは縦12筋の通りと通りの間、つまり背中合わせに建っている家と家の間に、下水路をつくったところにある。下水路は八幡堀につながっていて、現在もそのまま使われているところもある。

これは博多町割２年前の碁盤状の町づくりの事例である。

3)　京都の新地割

1590年（天正18年）豊臣秀吉は、聚楽第を中心においた京都の城下町化を意図した。

平安京の規模に基づく町割を整理し、寺町－高倉間，堀川以西・押小路以南の地域には、半町ごとに南北の道路をつけた短冊型の新地割を断行した。

さらに屋敷替，寺院再配置を行い、1591年（天正19年）には、総延長５里26町におよぶ御土居の建設を行っている。東は賀茂川，北は鷹ケ峯，西は紙屋川，南は九条という新しい京都の境域を示したもので、平安京の創設以来はじめてできた羅城であり、いわば聚楽第を中心とした京都の城塞化である。

しかしこのような意図は京都衆の抵抗によって失敗に終わったと見られている。

特に短冊型の新地割に対して、四条室町を中心とした祇園会の鉾町地区は反対・抵抗し、旧来の町割を変更しようとしなかったのである。

4)　当時の町割の経緯

豊臣秀吉の周囲を取り巻く町割の経緯は以上のような事例がある。

自由都市である堺環濠都市が、近江八幡（1585年）の環濠碁盤状都市づくりに何らかの影響を与え、さらに近江八幡の実績が博多復興（1587年）の基本町割に影響を与えたと考えられよう。

さらに近江八幡および博多町割で実績を積んだ短冊型町割は、京都（1590年）では一部の実施のみに終わったのである。

(3)　博多の宅地割

博多の町の宅地割の資料としては、博多復興から170年ほど経過した江戸期の1763年（宝歴13年）の記録（「石城志」）がある。

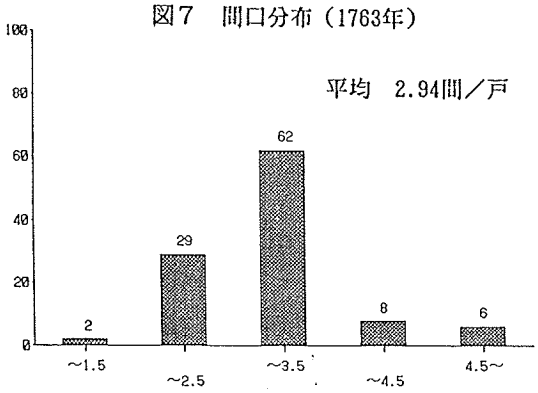
人口経緯についてはあとで示すが、この頃まで戸数（約3000戸）は大きな変動はないようなので、一応この資料から復興時の宅地割を推定する。

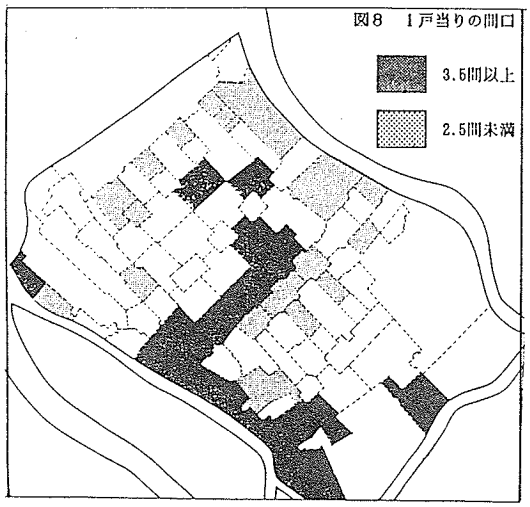
この資料から求めた１戸当りの間口の平均は2.9間／戸であり、堺の町の１間半から２間に比してかなり広くとれている。

さらにその宅地割の配分は、中心地区である東町（宗室居室），呉服町，西町（宗湛居室）では大きくとられ、周辺にいくほど狭い間口となっている。

また外周部（いわゆる新町と呼ばれる地域）の間口が広くなっているのは、江戸時代になってから新築が増え宅地割が変更されたためであろう。

図７　間口分布（1763年）





また地区外との出入部は橋で固めると同時に橋詰めには寺院を配置するという、堺や近江八幡に共通する形態をとっているのは、もちろん町の自衛を意識したものであろう。

(4) 博多の町の人口推移

博多という範囲が異なるため単純に比較は難しいが、人口推移を見ると表１のとおりである。

博多復興が行われた1587年前後から博多の町は約3000戸と安定したまま推移しており、明治に入ってから5000戸へと増大していっている。

このうち、町別に比較が可能な1763年，1890年の２ヶ年について戸数比較したものが図10である。

比較区域内の戸数は1763年3339戸が、1890年には4830戸と45%の増大を示しており、明治に入って博多の中心性が増大したことがわかる。

この増加状況を町別に見ると、

a．間口と同様に外周部（いわゆる新町）の戸数増が著しい。

b．旧来からの博多部は、一部の間口の広い町が宅地分割されて戸数増大しているものの、全体的にはほとんど変わっていない。

ことがいえる。

このような戸数増の状況からみて、明治に入っても博多の町の中心部は江戸期の姿のまま、あまり変わらず推移している（一部宅地割の広い街区が分割されて戸数増したのを除いて）といえよう。

以後も第２次大戦まで、この姿が保存されていたのであろうが、戦後の町の姿は大きく変貌してきている。

表１　博多の町の人口推移

	戸数	人口推定	
1471年頃	約１万戸	5万～8万	「海東諸国記」
1561年頃	約１万戸		「宣教師書簡」
1571年頃	約３千戸		「同上」
1690年頃	3118	19516人	「筑風土記」
1732年頃	享保の飢饉で人口減少		「石城志」
1763年頃	3395	14619人	「石城志」
1884年（明治17年）	5908	25095人	福岡市史
1890年（明治23年）	5418	29697人	福岡市史
1990年（平成2年）	5679	11852人	

注）範囲は完全に一致していないので、あくまで比較は大旨である。

５．街づくりからみた博多の町割りの考察

博多の町割を考察するにおいては、1587年（天正15年）の秀吉の立場を確認しておく必要がある。

この時秀吉は薩摩島津氏の討伐を終え、九州をその支配下に置いた、いわゆる安定期に入っている。さらに1591年（天正19年）には朝鮮出兵の本拠地である佐賀名護屋城の築城を開始しており、当然のことながら朝鮮出兵構想には博多の町あるいは博多商人の利用を、兵站基地として思い描いていたと考えられる。

これまでの資料整理によると博多の町の特徴は

① 防備性の高い環濠都市であること。

② 都市内道路はわかりやすく、広い（5.5m～4.5m）碁盤状道路であること。

③ 宅地割は短冊型（東西120m，南北240m）を

図９　戸数増加率図（1890年／1763年）

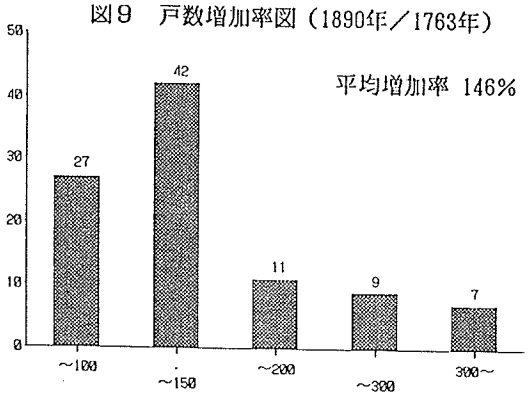
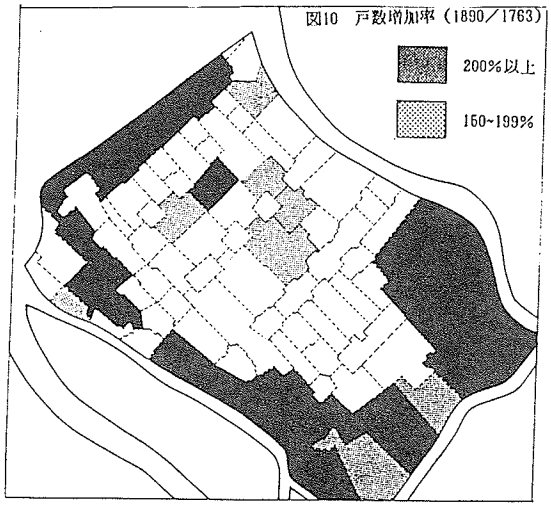


図10　戸数増加率（1890／1763）



基本とし、家屋は背中合わせとしていること。

④ 間口は当時の他都市（堺では1間半から2間）と比べて、平均3間程度と広くとっていること。

⑤ 宅地の配置は、中央部に広い敷地をとった主要商人を置き、周辺部との出入り部には寺院を配置していること。

に集約される。

これらの特徴を

a．防衛性（軍事性）

b．繁栄性

c．新鮮性

の視点から整理したものが表2である。

この町づくりは、繁栄性と新鮮性からみて、大きな特徴がみられ、今でいう「ニュー商業タウンづくり」のモデル都市づくりであったと考えられよう。

歴史的には失敗であったが、渡海構想を目前として計画された街づくりとして博多の町を見直せば、国際交流の拠点都市としてよみがえろうとする福岡の位置付けが再認識できそうな気がしてならない。

表2　博多の町づくりの評価

特　徴	防衛性（軍事性）	繁栄性	新鮮性
① 環濠都市	堺の環濠を破壊してたのに比べると、次の戦いの兵站基地として充分意識されている。 ○	周囲との分断性はある。 ×	堺，近江八幡等と事例は多く、新鮮性はない。 ×
② 広い碁盤状道路	外敵からの防衛性としては弱い。安定支配期の町だから可能であったのであろう。表小路に面した町並みと広い間口は、内部的な防災面から意義がある。	商品の移動や販売を意識した近代商業都市としての街づくりである。 ○	現在でも利用できる道路の広さは当時としては、充分新鮮である。 ○
③ 短冊型の宅地割		四角形の町割では裏小路ができる。短冊型では、すべての宅地が表小路に向けるわけで、商業機能を充分に生かす意図が感じられる。 ○	それまでが、1町四方（矩形）の町割が多かったのに対して、裏小路をなくした短冊型はおおいに新鮮である。 ○
④ 広い間口	△	商業店等への配慮がある。 ○	京や堺と比べて間口の広さは新鮮である。 ○
⑤ 施設配置	周辺に寺院を配置し、中心部に比較的広大な敷地を準備したのは、軍事的見地からであろう。 ○	中心部の広い敷地の配置は、来客の宿泊施設としての利用も意図しており、町全体が、商業・宿泊・流通・軍事のコンプレックス機能を有している。 ○	堺や近江八幡等でもみられる施設配置である。 ×

文　献　表

1．「筑紫国統風土記」　貝原益軒（1690年）

2．「石城志」　津田元顧・元貫（1763年）

3．『古代の博多』　中山平次郎

4．『古代の都市・博多』　朝日新聞福岡総局

5．「福岡市の土木史的考察（その1）」　秀島隆史『第6回日本土木史研究発表会』

6．『福岡町名散歩』　井上精三　葦書房

7．『博多歴史散歩』　白石一郎　創元社

8．「福岡市史」　福岡市

9．『日本の歴史　3．奈良の都　中公文庫

4．平安京　〃

12．天下一統』　〃

10．「堺環濠都市遺跡の現状と課題」『堺の四季』31号　（財）堺文化観光協会